

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K18480

研究課題名（和文）軍事研究を哲学する：デュアルユースの観点から

研究課題名（英文）Philosophising military research: from the perspective of "Dual-Use"

研究代表者

出口 康夫（Yasuo, Deguchi）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：20314073

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、イデオロギー問題として回収されがちな軍事研究問題を、多様な専門領域や多岐にわたる観点から考察を加えることで、タブーなき議論を可能にする足場を提供することを目指した。加えて本研究は、軍事研究問題を、軍事研究は是か非かという単純な問題に回収するのではなく、学術研究が生み出しするより一般的な負の側面をも視野に入れる一方、善悪の置換可能性まで含めたデュアルユース問題への転換、多岐にわたる学術領域が現に抱えているデュアルユース問題の可視化といった論点にも挑んだ。その成果として本研究は、出口康夫・大庭弘継編『軍事研究を哲学する：科学技術とデュアルユース』（昭和堂、2022年）を刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、核・原子力、宇宙、バイオテクノロジー、サイバーセキュリティ、ドローンといった先端科学技術が直面しているデュアルユース問題の事例を検討し、そのうえで哲学的考察を加えたことで、学術研究としてのデュアルユース問題を扱う土台を確立した。特に、本研究で提示した混用態や共用性といった概念は、今後デュアルユース問題を検討するうえで有用なツールとなると考えている。また、社会においてデュアルユース問題を議論するうえでも、軍事研究の是非といった単純な問題に還元できない実情を明らかにしたことで、より多岐にわたる考察を可能にした。

研究成果の概要（英文）： This study aimed to provide a platform for taboo-free discussion by examining the issue of military research, which tends to be regarded as an ideological issue, from a wide range of perspectives and in a variety of fields of expertise. In addition, this study did not simply focus on the military research issue as a simple question of whether military research is right or wrong, but also took a look at the more general negative aspects that academic research produces. This study also took on the challenge of visualizing the dual-use problem that a wide range of academic fields are currently facing.

This study resulted in the publication of "Philosophy of Military Research: Dual-Use of Science and Technology" edited by Yasuo Deguchi and Hirotsugu Ohba (Showado, 2022).

研究分野：哲学、応用哲学

キーワード：軍事研究 デュアルユース 先端科学技術 ELSI

1. 研究開始当初の背景

2015年、防衛装備庁が大学を含めた研究機関を対象に資金を助成する「安全保障技術研究推進制度」を開始した。大学も対象とする防衛装備庁の助成制度に対し、軍事と距離を置いてきた学術関係者は「学術が軍事との関係を深めることで、学術の本質が損なわれかねないとの危惧」が示し、日本学術会議は、安全保障と学術に関する検討委員会を設置し、検討を重ねた。その検討を経て学術会議は、「軍事的安全保障研究に関する声明」(2017年3月24日)を出し、「軍事的な手段による国家の安全保障にかかわる研究」を「軍事的安全保障研究」と呼称したうえで、「軍事的な手段による国家の安全保障にかかわる研究が、学問の自由及び学術の健全な発展と緊張関係にある」と指摘した(声明、一頁)。さらに「報告 軍事的安全保障研究について」(2017年4月13日)は、「軍事的安全保障研究では、研究の期間内及び期間後に、研究の方向性や秘密性の保持をめぐる、政府による研究者の活動への介入が強まる懸念」があると指摘し、「研究の入り口で研究資金の出所等に関する慎重な判断」が必要だとして、「大学等の各研究機関」に対して「軍事的安全保障研究と見なされる可能性のある研究」の「適切性」について「審査する制度」と、学協会に対して「ガイドライン等を設定」することを提言した(声明、一頁。報告、五頁)。その結果、大学等の研究機関や学協会は、軍事研究問題に向き合わざるを得なくなった。

2. 研究の目的

学術は、軍事や安全保障に対してどう向き合うのか。これまでは、学術会議のスタンスのように、軍事に協力しないという主張で説得力を有していたかもしれない。しかし、技術の両用性を意味するデュアルユースが注目されるように、自明であった軍事と民生の区別は、もはや自明ではない。また軍事研究問題は、容易にイデオロギー問題に回収されてしまうため多角的な検討が困難であった。そのため、軍事研究に関する議論は複雑さを増している。

そこで本研究は、近年の日本のアカデミアで喫緊の問題として浮上した軍事研究問題を多角的かつ哲学的に検討することを目的とした。だが、この軍事研究問題は、アカデミアが軍事研究をする／しない、という単純な選択の是非問題に還元できないという直観が、本研究の出発点であった。

一方で、軍事研究問題が浮上する以前から、科学技術がもたらす危害については、科学技術社会論等で俎上に載せられていたし、またデュアルユース問題は、特にバイオテクノロジーの分野で、研究成果のテロ利用や意図せざる危害の問題として捉えられてきた。さらに既存の安全保障貿易管理など、国家安全保障の問題も絡んでくる。一見、単純にとらえることができる軍事研究問題は、多角的に見直した時、複雑に絡み合ったアポリアとして、現出することになる。

そこで、本研究は、軍事研究をめぐる議論状況を、より多角的なものへと再編成することを目的とし、論じられるべき新たな視座を、学界や社会に向け、緊急動議的に発議することを目指した。従来の議論の盲点をあぶり出し、新たな議論軸を設定することで、軍事研究を巡る議論をより多角化するとともに、より事実即した生産的なものとすることを目指したのである。

もちろんこの問題を、一部の哲学者のみで解決できるはずがない。そこで、本研究では、哲学以外の様々な分野の専門家をメンバーとすることで、種々の学問分野が抱える具体的な状況や問題に即して、きめ細かな議論を積み上げることを目指した。

3．研究の方法

本研究では、2018年度から19年度末(20年3月)まで、研究参加者による研究会での意見交換や外部講師を招へいしての講演会、学会報告等での成果報告などを実施した。これらの活動を通じて、多様な専門分野の研究者が一堂に会することによる学際的な交流を重視し、異なる観点からのディスカッションを行うことができ、研究の質を向上させることができた。

しかしながら、2020年春以降、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、対面での会合が困難になり研究の進捗に遅れが生じることとなった。とはいえ、メールやZoomなどのオンライン会議を積極的に活用することで、研究参加者は、意見交換と知見のブラッシュアップを継続的に進めることができた。

コロナ禍の渦中であった20-21年度において、研究参加者は自身が担当したテーマについて原稿の執筆を行い、21年度末には研究参加者全員が執筆した原稿が集まり、22年度に研究成果をまとめた書籍を刊行した。

4．研究成果

本研究は、その成果として、出口康夫・大庭弘継編『軍事研究を哲学する：科学技術とデュアルユース』(昭和堂、2022年)を刊行した。

本書は、イデオロギー問題として回収されがちな軍事研究問題を、多様な専門領域や多岐にわたる観点から考察を加えることで、タブーなき議論を可能にする足場を提供することを目指した。また本書は、軍事研究問題を、軍事研究は是か非かという単純な問題に回収するのではなく、学術研究が生み出しするより一般的な負の側面をも視野に入れる一方、善悪の置換可能性まで含めたデュアルユース問題への転換、多岐にわたる学術領域が現に抱えているデュアルユース問題の可視化といった論点にも挑んだ。

以下、本書の構成に沿いつつ、個々の章へと結実した本研究の研究成果を概観する。

「序論 デュアルユースとELSIに取り組む総合知にむけて」(出口康夫)は、デュアルユースを「同じ一つの被使用物が、二つの異なったカテゴリーに属することが予想されること」との最大公約数的に定義したうえで、「ファクトの切り出し」と「哲学的深掘り」という本書の論考の手法を大きく二つに分けて概説した。

「ファクトの切り出し」は第一部「歴史的に考える」と第二部「個別の技術から考える」の各章で展開された。

「第1章 歴史学的手法で論点を整理する」(喜多千草)では、日本がしばしば参照する米国の科学技術政策が、軍事予算の影響を色濃く受けてきた歴史を考察し、日本とは全く異なる構造であることを明らかにした。「第2章 学術会議声明：そのビフォー・アフター」(玉澤春史)は、日本学術会議の声明への学会・研究者の反応を分析し、デュアルユース問題を明白に抱える学会と、必ずしもそうではない学会における温度差、さらには天文学会で見られた世代間での対応差といった、一枚岩では語れない状況に光が当てられた。「第3章 原子力のデュアルユース問題は単純か」(濱村仁)は、デュアルユース技術の管理が最も制度化されている核・原子力技術を題材に、複雑な制度やシステムを導入しているにもか

かわらず、完全には不拡散を抑止できていない現状を分析した。「第4章 宇宙開発・利用とデュアルユース」(橋本靖明)は、スピンオフ・スピンオンといった軍と民の技術を区別して考えることは過去の思考方式であり、今後は軍と民の技術的区別が消滅し、デュアルユース性は共用性へと展開するという見通しが示された「第5章 先端生命科学研究:微生物学研究と生物兵器開発の境界」(四ノ宮成祥)では、合成生物学による生物兵器開発の懸念を念頭に、軍事や民生といった区分に関係なく研究成果が悪用・誤用されうること、学術会議が重視する学問の自由(公開の自由)が制限されうること、といった現状が指摘された。

「第6章 サイバーセキュリティとデュアルユース性」(荻野司)は、サイバー領域においては、そもそも軍事と民生の区別はなく軍民共同で対処している現状、さらにサイバー技術が軍民関係なく攻撃にも防衛にも使用できる技術であることなど、デュアルユース(両用)を超えたミックストユース(混用)という現状を指摘した。「第7章 自律型兵器と戦争の変容」(久木田水生)では、ドローンの現状やキラーロボットの議論を念頭に、自律型兵器の投入といった戦争の自動化が、より残虐な戦争をもたらす一方、そのような自動化が人間性そのものに深刻な影響を与える可能性が描かれた。

「第 部 哲学・倫理学から考える」では、上記の各章での議論を踏まえた哲学的考察が展開された。

「第8章 功利主義と軍事研究」(伊勢田哲治)では、倫理学の正戦論の観点から一定の条件下で戦争が倫理的に許容されることを指摘し、正戦論を展開する形で正・軍事研究論を提示した。「第9章 デュアルユースは倫理的ジレンマの問題か:研究の自由と制限」(神崎宣次)は、学術会議が重視する学問の自由が絶対的な自由ではなく制限付きの自由であることを指摘する一方で、危害を予測し事前に制限する予防原則(その拠り所である二重結果論)では、デュアルユース問題の危害について合理的な予見が困難である、といった問題点についても指摘した。「第10章 正戦論の研究は、すなわち軍事研究なのか」(眞嶋俊造)は、執筆者自身が蒙った正戦論研究 軍事研究というラベリングと批判を単著に、「軍事研究」というラベリングが研究を誹謗する手段と化す懸念について、思考実験的事例を用いて例示した。「第11章 学術と安全保障の折り合いをつける:日本学術会議声明を受けて」(大庭弘継)は、学術会議声明が必ずしも軍事研究すべてを否定したわけではないと指摘したうえで、適切な安全保障と不適切な安全保障の狭間に位置する境界事例を取り組むべき喫緊の課題として列挙した。「第12章 デュアルユースからミックストユースへ」(出口康夫)は、デュアルユース問題の近未来を予測し、軍事と民生という技術的区分が消滅し混用化すること、潜在的には兵器になりうる民生品が混用的技術や民生品が市中に蔓延することで、安全保障上の脅威となりうること、さらにはその阻止のために過剰監視社会が到来する可能性という、混用ディストピア・ジレンマが指摘された。

また本書は、4つのコラムを収録した。「コラム 軍事研究と基礎研究」(本田康二郎)は、理化学研究所(理研)を躍進させた大河内正敏が、軍民両用研究とその産業化を念頭においていたこと、またその成果が湯川秀樹のノーベル賞受賞など、日本の科学の発展に貢献したことなど、軍民両用の皮肉な一面を明らかにした。「コラム 十五年戦争期の日本の医学犯罪は「戦争の狂気」のせいか?」(土屋貴志)は、日本の戦争犯罪として名高い731部隊は「戦争犯罪」というよりも「医学犯罪」であるとして、戦争犯罪というラベルでおおわれてきた医学研究の暴力性について考察した。「コラム 論理学と軍事」(村上祐子)は、暗号技術・解読技術の発展と論理学・数学の発展が表裏の関係にあること、さらにはその発展が研究者たちの国際協力によって支えられてきたことなど、軍事研究と学術研究の表裏

の関係と国際性という側面が提示された。「コラム 先端生命科学と情報技術の進展」(井出和希)では、医学における個人の生体情報の収集と活用の自動化が指摘され、システムが自動的に人々を抽出し活用する近未来への危惧を示した。

以上のような成果を上げた本研究だが、それは軍事研究問題 / デュアルユース問題に対して最終的解答を与えるものでは、もちろんない。むしろ、その問題を、今後とも、あらゆる学術領域において議論されるべき課題として提議しなおしたことが、本研究の最大の意義であると思われるのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Minari Jusaku, Shinomiya Nariyoshi, Takashima Kayo, Yoshizawa Go	4. 巻 4
2. 論文標題 Contiguous Governance of Synchronic and Diachronic Changes for the Use of Genome Editing Technologies	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Frontiers in Political Science	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fpos.2022.825496	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 本田康二郎	4. 巻 72 (6)
2. 論文標題 軍事研究と基礎研究：戦前の理化学研究所の科学技術政策	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 1131-1148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 四ノ宮成祥	4. 巻 187
2. 論文標題 近年の生物剤の動向と貿易管理	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 CISTECジャーナル	6. 最初と最後の頁 169-179
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 四ノ宮成祥	4. 巻 Vol.10(1)
2. 論文標題 解説 デュアルユースが懸念される研究とその教育	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JBSA Newsletter	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 四ノ宮成祥	4. 巻 10(1)
2. 論文標題 解説 デュアルユースが懸念される研究とその教育	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JBSA Newsletter	6. 最初と最後の頁 p.1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 眞嶋俊造	4. 巻 Vol.47-12
2. 論文標題 人工物が人間を殺傷することを決定し実行することは、道徳的に許容されるのか 自立型致死兵器システム (LAWS) を巡って	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 64-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 喜多千草 他	4. 巻 第4巻
2. 論文標題 特集1「軍事研究と大学とわたしたち」(第10回研究大会記念シンポジウム)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 戦争社会学研究	6. 最初と最後の頁 6-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久木田水生	4. 巻 第925号
2. 論文標題 ロボット兵器の倫理的問題：殺人の自動化というテクノロジー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 123-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久木田水生	4. 巻 第38巻第1号
2. 論文標題 ロボット倫理学：友達ロボットから殺人口ロボットまで	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本ロボット学会誌	6. 最初と最後の頁 18-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 眞嶋俊造	4. 巻 Vol.12, No.3
2. 論文標題 戦争倫理学入門 - 電子情報通信技術の軍事応用の倫理学へ向けて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 IEICE Fundamentals Review	6. 最初と最後の頁 201-208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Shunzo Majima	4. 巻 62 (1)
2. 論文標題 Target: the Japanese Defence Industry --- Ethical Issues Surrounding Military Hardware Manufacturers	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Revue Roumaine de Philosophie	6. 最初と最後の頁 33-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計32件（うち招待講演 15件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Nariyoshi Shinomiya
2. 発表標題 About the recommendation of Science and Technology (S&T) Advisory Process from the Federation of American Scientists (FAS)
3. 学会等名 Biological Weapons Convention, Meeting of Experts on Review of Developments in the Field of Science and Technology Related to the Convention (MX2) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nariyoshi Shinomiya
2. 発表標題 About the Tianjin Biosecurity Guidelines for Codes of Conduct for Scientists
3. 学会等名 Biological Weapons Convention, Meeting of Experts on Review of Developments in the Field of Science and Technology Related to the Convention (MX2) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 四ノ宮成祥、三成寿作 (オーガナイザー)
2. 発表標題 先進生命科学技術のデュアルユース問題と倫理規範の在り方
3. 学会等名 第33回日本生命倫理学会年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大庭弘継、橋本靖明、濱村仁、久木田水生
2. 発表標題 軍事研究のデュアルユース問題を哲学する 核・宇宙・AI を事例として
3. 学会等名 応用哲学会第12 回年次研究大会ワークショップ (予稿集刊行をもって形式上成立)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 眞嶋俊造・伊勢田哲治・大庭弘継
2. 発表標題 軍事研究の定義を哲学する 3つの試論
3. 学会等名 応用哲学会第12 回年次研究大会ワークショップ (予稿集刊行をもって形式上成立)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 神崎宣次、大庭弘継
2. 発表標題 対論型サイエンスカフェ「宇宙技術のデュアルユース、どこまで大丈夫？」
3. 学会等名 宇宙科学技術の社会的インパクトと社会的課題の学際的研究プロジェクト
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 橋本靖明
2. 発表標題 冷戦終結と1990年代の日本における宇宙安全保障関連の取り組み
3. 学会等名 第64回宇宙科学技術連合講演会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 喜多千草
2. 発表標題 米国での情報技術の発展と軍からの研究予算
3. 学会等名 戦争社会学研究会第10回大会記念シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 四ノ宮成祥
2. 発表標題 テロを含むバイオ災害の可能性と対策
3. 学会等名 危機管理フォーラム2019 「テロ・災害と医療対策」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 四ノ宮成祥
2. 発表標題 最近の生物剤の動向
3. 学会等名 第5回「生物テロ・バイオ災害対策担当者養成講習会」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nariyoshi Shinomiya
2. 発表標題 Biological risk assessment of leading-edge life science and its management
3. 学会等名 Biological Weapons Convention 2019 Meeting of Experts: MX2
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 四ノ宮成祥
2. 発表標題 先進生命科学技術がもたらすデュアルユース問題
3. 学会等名 ゲノム問題検討会議 シンポジウム 現代科学技術と人権 「科学技術は私達生活にどのように関わってくるのか」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 四ノ宮成祥
2. 発表標題 最近の生物剤の動向
3. 学会等名 シンポジウム「緊迫する国際情勢とCBRN脅威に対する備え」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 四ノ宮成祥
2. 発表標題 生命科学、合成生物学とバイオセキュリティ
3. 学会等名 外務省「外交・安全保障調査研究事業費補助金（調査研究事業）」に係る研究会合 「技術革新がもたらす安全保障環境の変容と我が国の対応」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 四ノ宮成祥
2. 発表標題 デュアルユースが懸念される研究とその教育
3. 学会等名 第19回日本バイオセーフティ学会シンポジウム2（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 四ノ宮成祥
2. 発表標題 新興生命科学技術と安全保障
3. 学会等名 「安全保障と新興技術」研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 四ノ宮成祥
2. 発表標題 ゲノム編集技術が有する科学技術上のデュアルユース性について
3. 学会等名 日本生命倫理学会第31回年次大会公募シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 四ノ宮成祥
2. 発表標題 生物兵器転用が懸念される先進生命科学技術剤
3. 学会等名 「ヒューマン防護システム研究部会」第14回講演会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 四ノ宮成祥
2. 発表標題 現在懸念されているバイオのリスク
3. 学会等名 第18回川越市市民健康講演会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Shunzo Majima
2. 発表標題 Ethics of Lethal Autonomous Weapons Systems
3. 学会等名 Bucharest Workshop in Military Ethics（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 眞嶋俊造
2. 発表標題 公共概念の現代的意義 国家主権、領土 / 安全保障と防衛を中心に
3. 学会等名 日本倫理学会 第70回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 眞嶋俊造
2. 発表標題 正しい議論の仕方（ワークショップ「「極化」現象のメカニズム の解明と「ポスト・トゥルース」時代の倫理学の役割」）
3. 学会等名 応用哲学会第11回年次研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 出口康夫
2. 発表標題 「軍事研究」を哲学する：趣旨説明（ワークショップ「「軍事研究」を哲学する：問題提起」）
3. 学会等名 応用哲学会第11回年次研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大庭弘継
2. 発表標題 軍事研究をめぐる論点の多様性：日本学術会議「安全保障と学術に関する検討委員会」における議論から（ワークショップ「「軍事研究」を哲学する：問題提起」）
3. 学会等名 応用哲学会第11回年次研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 本田康二郎
2. 発表標題 スピノンを意図した科学技術政策：理化学研究所を題材に（ワークショップ「「軍事研究」を哲学する：問題提起」）
3. 学会等名 応用哲学会第11回年次研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 玉澤春史
2. 発表標題 学術会議声明を受けた学協会の対応：宇宙地球科学分野を例に（ワークショップ「軍事研究」を哲学する：問題提起）
3. 学会等名 応用哲学会第11回年次研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河村聡人、大庭弘継、玉澤春史
2. 発表標題 宇宙状況把握 / 監視のデュアルコース性
3. 学会等名 第63回宇宙科学技術連合講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久木田水生
2. 発表標題 人工知能の倫理的課題：軍事利用、自動的意思決定による差別の事例から
3. 学会等名 情報ネットワーク法学会分科会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 眞嶋俊造
2. 発表標題 正戦論と軍事研究
3. 学会等名 2019年電子情報通信学会総合大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 本田康二郎
2. 発表標題 軍事研究と科学の公有主義：理化学研究所と技術院の比較を通して考える
3. 学会等名 2019年電子情報通信学会総合大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大庭弘継
2. 発表標題 「軍事研究」をめぐるアポリア：2017年学術会議声明等の分析
3. 学会等名 2019年電子情報通信学会総合大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大庭弘継、玉澤春史、河村聡人
2. 発表標題 デュアルユースと学術研究のグレーゾーン問題
3. 学会等名 第62回宇宙科学技術連合講演会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 マーク・クーケルバーグ著（直江清隆、久木田水生、鈴木俊洋、金光秀和、佐藤駿、菅原宏道訳）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 196
3. 書名 AIの倫理学	

1. 著者名 四ノ宮成祥、木下学 編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 イカロス出版	5. 総ページ数 255
3. 書名 すぐに分かるCBRN 事態対処Q & A いざという時に役立つ！	

1. 著者名 日本リスク研究学会編（四ノ宮成祥分担執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 832
3. 書名 リスク学事典	

1. 著者名 四ノ宮成祥、木下学 編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ハップ	5. 総ページ数 244
3. 書名 いざという時に役立つ！すぐに分かるCBRN事態対処Q&A	

1. 著者名 盛永振一郎、松島哲久、小出泰士編（眞嶋俊造分担執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 338
3. 書名 いまを生きるための倫理学	

1. 著者名 眞嶋俊造	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 188
3. 書名 平和のために戦争を考える 「剥き出しの非対称性」から	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	喜多 千草 (Kita Chigusa) (10362419)	京都大学・文学研究科・教授 (14301)	
研究分担者	本田 康二郎 (Honda Kojiro) (40410302)	金沢医科大学・一般教育機構・准教授 (33303)	
研究分担者	神崎 宣次 (Kanzaki Nobutsugu) (50422910)	南山大学・国際教養学部・教授 (33917)	
研究分担者	眞嶋 俊造 (Majima Shunzo) (50447059)	広島大学・総合科学研究科・准教授 (15401)	
研究分担者	大西 琢朗 (Onishi Takuro) (50773529)	京都大学・人社未来形発信ユニット・特定准教授 (14301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伊勢田 哲治 (Iseda Tetuji) (80324367)	京都大学・文学研究科・准教授 (14301)	
研究分担者	四ノ宮 成祥 (Shinomiya Nariyoshi) (40505260)	防衛医科大学校（医学教育部医学科進学課程及び専門課程、動物実験施設、共同利用研究施設、病院並びに防衛・分子生体制御学・教授 (82406)	
研究分担者	久木田 水生 (Kukita Minao) (10648869)	名古屋大学・情報学研究科・准教授 (13901)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	大庭 弘継 (Ohba Hirotsugu) (00609795)		
研究協力者	玉澤 春史 (Tamazawa Harufumi) (90829441)		
研究協力者	土屋 貴志 (Tsuchiya Takashi) (90264788)		
研究協力者	村上 祐子 (Murakami Yuko) (80435502)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	濱村 仁 (Hamamura Jin)		
研究協力者	橋本 靖明 (Hashimoto Yasuaki)		
研究協力者	荻野 司 (Ogino Tsukasa)		
研究協力者	井出 和希 (Ide Kazuki) (60796275)		
研究協力者	河村 聡人 (Kawamura Akito Davis)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関